

第四回服部商店勉強会

大変寒かった正月明けの1月17日に第四回服部商店勉強会を催しました。日頃の行いが良かったのか解かりませんが、少し寒さが厳しくなかった事は、今回は遠方からの参加者が有りましたので大変喜んでます。

勉強会も四回目になりました。一回目はタモ原木の製材、二回目はスプルース原木の製材、三回目はナラ原木の製材と市場にある程度量的に流通している原木の製材を見ていただきました。しかし今回は貴重品になりつつあるチーク原木の製材を見ていただきました。

出席者は建築士さん、工務店さん、一般の木工所さん、家具作りの工房さん、地方の材木屋さん(愛知県)と幅広い参加者が集まりました。総数25名程度の参加者でした。

この原木は正規ルート(国際オークション)の材です。品質は最高級のグレード(カットログ)に該当します。製材寸法は建具用の55ミリと木工用の28ミリに製材しました。

勉強会の進め方は以下の様に執り行ないました。

- 1、チーク原木の現地木番号の説明 原産地証明に結びついている根拠。
- 2、現地の寸検 ホップス法と言う寸検の方法 この原木は13-5-10 とうたわれています。
- 3、55ミリの建具用と木工用の28ミリの取り分けの仕方。

1~3の簡単な説明にしましたが、参加者には別のプログラムを渡していました。そのプログラムの中にミャンマーの軍事政権と中国との係わり合いを説明『正規ルート以外のチーク材は日本の国内で幅広く流通している中国産の地球環境に優しくないユナイプのフローリングになっています。』しました。

参加して頂いた方からの質問で大変面白い物が有りました。その質問は初めての体験でした。

その質問は『服部さん今回製材したチークの出来具合は100点満点で何点ですか』と言う物でした。私は70点とお答えしました。製材をお見せしたこの原木は凄く値段の高い木です。しかし割って中身が自分が考えるより悪ければ、買い付け時思っていた厚みの板を取れません。実際二種類の板を取ったのですが、目通りの良い物は55ミリ、そして少し落ちる材は28ミリに製材したのですが、原木の価格から見て全て55ミリに製材しなければ採算は取れないのですが、営業マンが売り難い製材をあえて取らないのが服部商店の生き様です。と説明申し上げました。



服部商店が考える材木に対する哲学は必要な品質を求めお客様に必要な製材品を買っていただく、材木屋にとって凄く当たり前の事をただ実践しているだけです。

品質と価格は必ずリンクしています。安い材に良い物は無い。ただし原木の見方は人それぞれ違います。

木材の価格は品質の良い材は悪い材より値段が違う事は誰でも理解出来ると思います。しかしそこに材木屋の専門用語で木味（キアジ）と言う言葉が入れば凄く解かりにくくなります。

無節と節有りでは誰でも値段の違いは解かります。しかし同じ無節でも荒い木目と細かい木目の材が有れば皆様はどういう思いをされるのでしょうか。

木味(キアジ)と書いているのですが、本当に木に味がするの？と聞かれれば確かにします。しかしそれは舐めたりしません。単純に言えば木味イコール色です。色は目の細かさとも関係しています。

具体的に北海道産の広葉樹を例にします。材木屋の原木の下見方法のマニュアルを下に書きます。

- 1、まず元木かそれとも二番木かを判断します。
- 2、次に木肌のチェックをします。
- 3、次に木口を見ます、元も末も両方を見ます。
- 4、そして長さや径級の情報で値段を付けます

以上の作業が原木の最低必要な見方ですが、最近の原木を見るととき 1～4の作業を終えて評価をオール〇と採点できる材ははっきり言って無いです。

1～4の工程を経て買い付けに成功した原木を上手く良い製材品にするには、まず何処から鋸を入れるか、何のサイズを取るか、どう言う製材方法が良いかを考えていかねばならないほど良質な原木は枯渇しているのが現状です。



左記の写真はナラ原木の葉節です。我々材木屋は『カラス』と言っています。見えている場所だけが製材時、出るのかそれとも年輪に沿って出るのかその答えは製材してみないと解かりません。

仮に製材時葉節が出たとします。それを上手く製材品に入れない製材方法を取ります。

少し歩留まりを落として良い製材品を作るのです。以上のような事を総合的に判断して価格を決定して原木の入札に望むのですが、入札に負ける事が最近非常に多くなって来ています。と言うのは材木屋でも原木屋と言う業種が有ります。彼らは外観の美しい原木を

好みます。葉節が出るか、それとも出ないかを余り考えずに買い付けをしています。



【欠点は製材を全部終了するまで誰にも解かりません。】

服部商店の原木買い付けの方針が有ります。それは安全第一です。お客様に無理して、欠点の有る材を販売出来ません。

これ位注意して原木を買い付けても終わりでは有りません。板を干して乾燥させるにも時間がかかります。最低1年以上の歳月が必要です。

左記原木は上記原木の肌の写真です。美しいのは解かると思いますが。美しい原木ほど上記の『カラス』が多いのが現実です。

服部商店は原木の買い付け方法は安全第一を優先に考える雑木屋です。

寂しい限りです。

服部新聞に、材木業者はもっともっと勉強しなくちゃならないと書いていますが、その意味を解かっている方が非常に多い事を痛感しています。材木屋として当たり前的事さえ出来ない方が多い事は、先々月号で材木屋の凋落は何時から始まったのかと言う記事で書いていますが、この製材品はどう言う製材方法で出来上がっているのだとか疑問を持たないのを私は本当に不思議に思います。

良い製材品が全て良い原木から出来上がっているとは決まっていない事を解かっている方が同業者にもうんざりするほどいます。

悪い原木でも全てが悪いとは限らない場合が有ります。例えばアガチス現地挽き製材品を例にします。現在日本に入っている主な産地はマレーシア・サバ州・シピタン産のアガチス製材品です。この産地の原木はアテが凄く多いのが特徴です。しかしアテの少ない板も入ってきています。アテの無い材もアテの有る材も両方共私は取り扱っています。何故両方を取り扱うのかと申しますと、現地で板を100枚製材したとします。アテの有る板が80%以上出来ます。しかしその使い道を説明しそしてそのアテと言う特徴を上手く使っていただけるお客様を持っていれば、おのずと流れて行くのです。昔私が若いときマレーシアのシピタンに行きました。その時の材質も余り良くなかった思い出は有りますが、今この余り良くない産地しか入ってこなかったらこれを上手く捌くしか材木屋として生き残れないのです。

お客様の必要な品質を常時理解し、輸出される産地の情報及び状況等々の本当の事をしっかり知っていれば、簡単に理解出来ます。これこそ材木屋の仕事では有りませんか。

私は木材その物が、案外単純だからこそ勉強しないのかなとは思いますが、材木屋は木材の勉強をするのが一番の仕事だと思います。【材木屋の若い連中は木材の勉強を積極的に是非して欲しいと思います。】



左記写真はマレーシアサバ州のシピタン地区の原木です。アテが非常に多いのが解かります。しかしこのリンクしか原木が出てこなければ、全く商売にはなりません。良い産地に材が豊富に出ていた10年以上昔ならともかく、まず原木の手当てが出来る事が一番優先される事なのです。

それを如何に仕訳してお客様のニーズに有った商品に仕上げる技術こそ材木屋の本懐なのです。

左記下の写真は現地でアガチスの板を一枚ずつ仕訳して並べている様子です。

この作業が一番大事なのです。

仕訳とは単に板をはねる事ではなく、良い材はそのまま、梱包し、問題の有る材は形を変更したりして日本のマーケットに合う材に変更する作業なのです。

製材して必要な材だけを現地からもって来たならたちまち現地の工場は倒産してしまいます。

倒産したらたちまち困るのは現地側ではなく日本側なのです。その理由は国産の木材資源が有るにも拘わらず、輸入材に頼っている我々日本のマーケットの構造その物の為です。



日本人はヨーロッパの一部の方々から南洋材の大量伐採をしたとか、色んな批判は有りますが、日本人はマレーシア・インドネシアの方々により多くの貢献をしたと思います。

インドネシア・マレーシアで【アテ】と言う日本語は向こうでも通じる言葉になっています。

*アテとは割り返すと曲がる性質です。【主に針葉樹に多く発生します。】しかし強度に問題は有りません。

新しい取り組みが必要ではないか

現在の日本は住まい作りを検証する必要が有ると思います。何故かと言えば本当に正しい住まいがお施主様に供給されていないのではと思うからです。何故欧米のような長持ちする住まいを日本人は供給出来ないのかを思うからです。日本の住宅の平均寿命は約35年です。アメリカでは約70～80年イギリスでは100年～120年です。政府も税制支援等の処置で高寿命住宅に支援を与えようとしていますが、それだけでは不十分だと思います。高寿命住宅に最低限必要な物は長持ちする構造設計ではないでしょうか。

私は建築士ではないので構造設計の中身は解りません。しかし最近一つの事を経験しました。それは私の父が平成元年に建ててくれた賃貸マンションで内装工事をしたのですが、有る住宅設備のメンテナンス会社からマンションの検査を受けました。構造その物は全く傷んでいません。しかし非常階段、非常照明、等々の設備が老朽化しているので更新しなくては行けませんと診断を受けました。

そこで私は不動産業者に連れて行ってもらい建築後新しい競合するマンションを見に行きました。そこで目にした物は真新しい住宅の設備機器でした。見せてくれた不動産業者は真新しい設備機器にもし更新しなかったら家賃は下がる可能性が大きいとの指摘も受けました。

亡き父がマンションを建てたのはあくまで土地の有効利用が主な目的でしたが、その当時父も私も親しい建築士さんはいませんでした。設計は銀行紹介の建築士でした。父がこのマンションを建てる時唯一建築士に御願っていた事を私は覚えています。それは地震に強い設計にして欲しい、それだけでした。

実際何も知らない人間がマンションを建てるのです。マーケットの調査等は銀行と建築士が調査を行って来て、住居部分、事務所部分と部屋割り等の事を決めてくれましたが、20年も時間が経つと周りの産業及び住宅環境は変化し建てた当時と較べて入居者のマーケットは変化をしました。私はこの20年の変化に耐える設計こそ本当のお施主が要求するものではないかと思います。構造がしっかりしているからこそ内装の更新が出来るのです。

ところで私は建築士さんと新しい取り組みをしていますが、その中の考え方は『スケルトンとインフィル』と言う考え方です。スケルトンとは図体と言う意味です。インフィルとは中身(内装)と言う意味です。

建築の場合どうしてもインフィル部分の考え方が先に出る傾向が多いと思います。それは新聞の折込みを見ただけで解ります。床暖房設備、浴室暖房設備、食器洗い機等々の住宅設備機器をフル装備と設備機器のことでばかり唄っていますが、私がマンションで経験したインフィルも大事だが、スケルトン部分が本当は一番大事だと言う事は全然取り上げていません。

現状の日本の住まい作りはスケルトンが本当にしっかり出来ているのかどうかそれが全く我々には解りません。良い産地のヒノキの管柱を使っているのか、否かとかの情報は全く解りません。

最近、建築士さんとの取り組み(新しい考え方で分譲住宅を提供する取り組み)で解ったのですが、プレカット工場に仕事の御願いをしようと思い、連絡しました。内容は構造材(ヒノキ材で土台を作る)の産地指定をすることでした。しかしこの要請の返事は不可能と言う返事でした。

ヒノキを例に取れば九州の日田地区、熊本地区、岡山県の美作地区、愛媛県の八幡浜地区、高知県の四万十地区、和歌山県の新宮地区、三重県の桑名地区、岐阜県の東濃地区と様々の産地が有るのですが、プレカット工場に一旦入ったら例えば土台でも産地はごちゃ混ぜになっているのです。九州の日田地区のヒノキと和歌山県の新宮地区の材は、値段は違います。この値段の違いはプロが見て付けているのです。(この産地の差は1本単価に直すと小さい差なのですが)木材の品質に価値があるのでその分高いのです。

ヒノキの管柱の価値の違いは年輪の細かさです。年輪が細かければ細かいほど色鮮やかになり一般に多少とも強度が強くなる傾向が有ります。(木材は個体差が多いが総じて目の細かい材質ほど優良材と言われます。)

柱1本300円～500円高い材を使っても、平均一軒の家で60本管柱を使っても、合計しても僅か30,000円の差では有りませんか。

私は建築士さんとの取り組みでスケルトン部分をクローズアップ出来る仕組みを作れないかを考えています。

木材業者は木材の銘柄つまり産地はせめて指定出来る木材の供給体制にして欲しいと思います。